『ナイト・ウィズ・キャバレット』（二幕六場）

西　史夏

【とき】
大正１４年(1925年)五所踏子２１歳、鏡千里３１歳の春から、太平洋戦争が開戦する昭和１６年（1941年）の早春までの１６年間。時刻は夜７時。

【ところ】
東京浅草アサヒホテル５０１号室およびキャバレー黒猫。

【ひと】
五所踏子（ごしょとうこ）（２１）から（３７）／（麦田一畝（むぎたいっせ））
鏡千里（かがみせんり）（３１）から（４７）／（鳥山唄子（とりやまうたこ））

【おんがく】
大正から昭和の初め、まだ日本が軍国主義に染められるまえ、紳士・淑女の社交場だったキャバレーで愛された、優しくて能天気なほど明るいチャーミングな歌たち…それが「キャバレット」。エリック・サティ、フォーレ、プーランク…はたまた北原白秋まで。音楽はすべてそれらキャバレットを中心に使用する。

プロローグ

春の闇。
蓄音機が浮かび上がり、SPレコードが廻りだす。
鳥山唄子が歌うエリック・サティの『あなたが欲しい』。
♪『あなたが欲しい』アンリ・パコーリ作詞

（日本語で）
私には分かったの　あなたの苦しみが
愛おしい恋人
だから　あなたの望みに従うわ
私をあなたの恋人にしてちょうだい
分別なんてもうないし　悲しみだってない
私は憧れる
私たちが幸せになれるつかのまのときを
あなたが欲しいの…

蓄音機、廻り続けたまま闇に消える。

■一幕
―一場

大正１４年（1925）４月／東京浅草アサヒホテル５０１号室
午後７時
鏡千里31歳
五所踏子21歳

夜。

色褪せた赤い壁を持つ、パリのアパルトマンを模した中級ホテルの一室。
ガレ風のランプだけが、室内を薄明るく照らしている。
舞台中央正面に、客席に向けて原稿が積み上げられた書斎机と椅子、下手にベッド、上手には窓がありカーテンがかかっている。部屋には他に、蓄音機、小さなテーブルと椅子、掛け時計がある。
おもむろにドアが開き、和装の婦人・五所踏子（21）が、おずおずと顔を出す。
踏子は用心深そうに小部屋を見渡すと、手に持っていた風呂敷包みを慎重に書斎机に置く。
また部屋を出ると、今度は中型のボストンバッグを運んでくる。風呂敷包みよりは重そうだ。
次にまた部屋を出ると、皮のトランクをひきずってくる。かなり重そう。
それらを室内に運び終えると、ほっと椅子に腰掛ける。
改めて室内を見渡す踏子。
積み上げられた原稿を盗み見しているうち、原稿が床になだれ落ちてしまう。扉前に落ちた一枚を拾いあげようとしたとき、目の前のドアが開き、鏡千里（31）が現れる。

踏子　（床に頭をついて）ご無沙汰しております。
鏡　平気。
踏子　え。
鏡　しゃがみこんだりして。
踏子　いえ、これは、あの。
鏡　ちゃんと、ベッドあるから。
踏子　ベッド。（ベッドを見る）
鏡　休むといい。（踏子を連れて行こうとして）
踏子　え、ええっ、いえ、あの。
鏡　疲れているでしょう。
踏子　いいえ、疲れてなんか！
鏡　ならいい。
踏子　（ちょっとガッカリ）ええ、はい。
鏡　やっぱり疲れてる。
踏子　随分、遠いんでした。東京は。
鏡　近江からは。
踏子　一日では、来られへんのですわ。こおんな、長い時間、列車になんか乗るんはじめて。
鏡　お座んなさい。
踏子　お先に。
鏡　いいから。
踏子（椅子に座る）でも、みなさん親切で、さくらもち、いただきました。
鏡　それはよかったね。（踏子の足元にしゃがみこむと、着物の裾をすこしはだく）
踏子　え。
鏡　（足をもんで）随分、歩いたでしょう。
踏子　は。
鏡　こんなに腫れて。こうすれば、うんと楽になる。
踏子　そんな、そんな、やめてください。
鏡　嫌かな。
踏子　こんな、めっそうもないこと。
鏡　でも、気持ちいいでしょう。
踏子　はい。

鏡、しばらく踏子の足をもむ。

踏子　女の足を揉んでくれる男の人なんて、初めてです。
鏡　ぱんぱんだよ。小さな足で、よくここまで、一人で…電報を読んで驚いたよ。
踏子　３年ぶりです。
鏡　もう、そんなに。
踏子　はい。
鏡　春だったね。
踏子　五箇壮の句会でも…さくらもちが出ました。
鏡　いつかは、すまなかったね。京都で。
踏子　ご存知でしたん。
鏡　吟行には参加されなかったから、まさか、駅まで来ているなんて。
踏子　私が、勝手にしただけのことですから。
鏡　家を出るのも、大変だったでしょう。
踏子　いいえ。
鏡　あなたはいつも、何も言わないね。
踏子　ありがとうございます。
鏡　え。
踏子　うれしくて。
鏡　うれしい？
踏子　私だけが、一目、お顔を拝見できればいいと…でも、列車の時間が間に合わなくて。それをご存知で、覚えていてくださって。
鏡　そら、これでよくなったろう。（立ち上がる）

鏡と踏子、見つめ合い、

踏子　鏡先生。お久しぶりで、ございました。
鏡　不思議だな。
踏子　はい。
鏡　新聞や雑誌ではいつも会っているのに、生身の人間というのはこうも違うものか。
踏子　ちがいますか。
鏡　ときに田舎のおっ母さんのような逞しい句を投稿してくる君の足が、こんなにも小さい。歩きすぎれば、ほおずきの実のように赤く腫れてしまう。さあ、こんどはこっちを向いて。（踏子を椅子ごと後ろに向けると、上着を脱がせる）
踏子　え、え。
鏡　だってこんなに。
踏子　でも、いえ、あの、あっ。
鏡　凝ってるじゃないか。
踏子　はい？
鏡　肩もパンパンだよ。とくに右だね。
踏子　確かに右利きです。
鏡　いやね、僕あ、もとが医者の卵だったじゃないか、だからね、どうもひとの骨やら筋肉のことが気になってしかたない。
踏子　（笑う）
鏡　なにがおかしいの。
踏子　ほんと、生身の人間はだいぶちがいます。
鏡　身体をばかにしちゃいけないよ。
踏子　鏡先生は、言葉の人やと思うてました。
鏡　身体あっての、言葉だよ。それにしても、この凝りかたはひどいな。
踏子　荷物が、多かったもんですから。
鏡　随分重そうだ。（トランクを持ち上げようとするが、なかなかあがらない）よく持ってきたね。
踏子　死ぬ気で運んでまいりました。

鏡　何がはいってるの。
踏子　着の身着のままでええと、家を出るつもりでした。最初は風呂敷包み一つ。（風呂敷をほどく。帳面が数冊）これでは収まらないと、納戸から主人の鞄をこっそり持ち出して。（鞄をあける。帳面がぎっしり）それでもまだまだ収まらない。お蔵からおしゅうとさまが洋行に使ったトランクを出してきて。（トランクを開ける。帳面があふれる）
鏡　（帳面を手に取ろうとする）
踏子　（帳面を抱え込み）これは…ごめんなさい！
鏡　荷物は全部、帳面ですか。
踏子　燃やしてしまおうとも、思いました。でも、これがこの世からなくなってしまったら、私が生きてきたあかしは一体どこにあるというんでしょう。ええ、どこにもなくなってしまう。
鏡　（もういちど帳面を手に取ろうとするが）
踏子　（帳面を抱えてぶんぶん首を横に振る）
鏡　（あきらめて）踏青。
踏子　はい。
鏡　きみの…。大胆な俳号だよ、芭蕉の二つめに名乗ったのが桃青（とうせい）だった。
踏子　芭蕉さまは青い桃で桃青、わたしのは青い草のほう。
鏡　青きを踏む、と、書いて、踏青。
踏子　はい。私の旧姓は青木。踏む子と書いて踏子。
鏡　確か、お父上も俳句を。
踏子　青きを踏む、この季語が好きやったそうです。
鏡　僕も、好んでよく使います。中国の古い行事がもとになっているが、青々とした草の上を踏む実感がある。春になった喜びが、身体全体を駆け巡るような。
踏子　父は私に、そんな風に、伸びやかに生きて欲しいと。
鏡　少女の頃の君が、目に浮かぶようだよ。
踏子　女は、姓が変われば人生も変わります。
鏡　五所さん。五所、踏子さん。
踏子　踏青と、呼んでください。
鏡　これは現実だ、新聞でも、雑誌でも、帳面のなかの世界でもない。
踏子　私は。
鏡　君は来た。その両足をほおずきの実のようにぱんぱんに腫らし、それでもなおトランクをひきずって、君は来た。この東京浅草の、アサヒホテル５０１号室に。
踏子　鏡先生は、ヨシ焼きをご存知ですか。
鏡　ヨシ？
踏子　私の町の、湖の淵にずーっと生えていた、水草のことです。
鏡　葦のことだね。
踏子　渡り鳥が北に帰って行く頃、湖の隅っこの、あちこちで、ぼうと炎があがります。私は小さい時から、それを見るんが好きでした。赤い火ぃからは、随分遠いとこから見てる筈やのに、なんや、ほっぺたが熱うなってきて、しまいには、胸の中まで焼けるように熱う、熱う、なってきて、小さい私は、なんやろこれは、なんやろこれは、と、思いながら家まで帰るんです。お人形遊びしてても、おはじきしてても、唄を歌うても、ずっと熱い。大人になっても、おんなじ。お漬もん漬けてても、着物を繕うてても、ずっと、ずっと熱い。
鏡　…
踏子　ヨシ焼きは、次の季節に、草がよう繁るようにする行事です。焼きつくさんと、夏は来んのです。
鏡　夏という季節は、短いものだよ。
踏子　冬も、春も、夏のためにあるもんです。せやから。
鏡　ほおずきの足。

踏子　ほずきの足。鏡先生は、何もかもわかっておいでや、せやから、せやから私は。
鏡　でも、着の身着のままとは穏やかじゃない。電報を見て驚いた。
踏子　虚子先生も、ぜひ御出でなさいと言うて下さいました。
鏡　それは、総会に出席するなら、という意味だよ。
踏子　家で「ホトトギス」の総会に行きたいと言ったら、会誌と句帳を捨てられました。
鏡　ご主人かい？
踏子　お舅様です。
鏡　それは…つらかったね。

鏡、カーテンを開ける。

鏡　おいでよ。

踏子、鏡の横に並ぶ。

鏡　ごらん。このホテルの5階は、ここらじゃ一番高い場所だ。浅草のぐるりが見渡せる。
踏子　きれい。
鏡　前はもっとまぶしかった。あそこに凌雲閣という12階建ての塔があってね。一昨年の震災で壊れてしまった。
踏子　中にいた人は？
鏡　皆、亡くなってしまったよ。
踏子　恐ろしい。
鏡　客寄せに後から付け足したエレベーターがいけなかった。建築家はずいぶん反対したそうだが。地震に耐えられる構造じゃないことはわかっていたのに。
踏子　このホテルは。
鏡　平気だよ、たった5階さ。いざとなったら飛び降りればいい。
踏子　鏡先生は、怖くないんですか。
鏡　高いところが？
踏子　ええ。
鏡　僕は好きだね、特に自分の足で登ることが好きだ。今は浅草の人たちも怖がっているけれど、いずれまた、うんと高いのが出来るよ。

踏子、ひらめいた様子で懐から句帳を取り出すと俳句を書き込む。

鏡　一句出来た？
踏子　はい。
鏡　「浅草の灯りまばゆし春の闇」季語は、春の闇だね。
踏子　光があるから闇に気が付くし、闇があるから光に気が付く。不思議なもんですね。

鏡、壁時計を見る。

鏡　今から30分で、10句作れる？
踏子　今ですか。
鏡　8時から句会があるんだ。
踏子　総会は明日やないんですか。
鏡　僕の主宰している句会だよ。
踏子　鏡先生が主宰？虚子先生には。
鏡　もちろん内緒。
踏子　いけません！師匠に黙って結社のかけもちなんて。
鏡　結社なんて大げさなもんじゃないよ、ほんの息抜きさ。ほら、

ぴかぴか光ってる。あの辺り、あれが六区のキャバレー街、
その地下に「黒猫」って店がある、そこが、僕らのたまり場、
不良たちの巣。
踏子　そんなところで句会だなんて。
鏡　信じられないかい？俳人だけじゃない、画家、作家、歌手、
活動屋、面白い連中がわんさか集まって、毎晩化学反応を起
こしてる。
踏子　化学反応？
鏡　人と人がぶつかりあって、バクハツするんだ。そして、わ
けのわからないものが出来上がる。
踏子　まあ、怖い。
鏡　君をそこに一滴たらすと、なにが出来るんだろうね。
踏子　私を？
鏡　今夜は一緒に、バクハツしよう。
踏子　鏡先生。
鏡　俳句にぶつけてさ。
踏子　あ…あ…

踏子、書斎机に向かう。

鏡　その調子だ。浅草吟行のつもりでいい。いや、近江から始
まった列車の旅、そこから始めよう。湖の近くの小さな花、
車中でのさくらもち、途中で見つけた停車駅の春。
踏子　黙っててください。
鏡　あ、すまない。なんか、怒ってるのかな。
踏子　いいえ。（黙々と書く）
鏡　あと9句、あと8句。
踏子　先生。
鏡　ごめんごめん。

間

鏡　それにしても家出なんて、ご主人、心配してるんじゃないかな。

踏子、立ち上がる。

鏡　ごめんごめん。

踏子、風呂敷から壺を取り出し、差し出す。

鏡　（蓋を開けて）梅干し。
踏子　五箇荘の梅です。
鏡　覚えていてくれたんだね。ここの梅が食べてみたいって。
踏子　御台所の床下に仕舞うてたんです。ほかのお漬けもんやら、
梅干しやらは、納屋に置いてありますけど、これは特別やさかい。
鏡　3年ものか。
踏子　全部、鏡先生のもんです。

鏡、梅干しを一つ食べる。
ドアをノックする音。

鏡　…
踏子　…

再び、ドアをノックする音。

声　鏡先生、鏡千里先生！
鏡　迎えだ。

踏子　行ってください。
鏡　でも。
踏子　お先に。すぐに降りますさかい。
鏡　歳時記は、持ってる？
踏子　はい。
鏡　持ち物はそれだけでいい。ほかの荷物は…ここに、置いておきなさい。

鏡、出ていこうとする。

踏子　鏡先生！
鏡　なんだい。
踏子　種を。
鏡　（踏子のてのひらに種を吐き出す）

鏡、逡巡の後、出ていく。

踏子　焼きつくさんと、夏は来ん。

ドアが開く。
鏡が戻って来る。
鏡と踏子、接吻する。
二人、求め合う中…溶暗。

音楽。
エリック・サティ「あなたが欲しい」（フランス語）

―二場

一場から４年後
昭和４年（1929）４月／東京浅草アサヒホテル５０１号室
午後７時
鏡千里35歳
五所踏子25歳

一場から引き続き流れているエリック・サティの『あなたが欲しい』。
蓄音機の上でレコード盤がまわっている。
そばでうっとり聴いている踏子。相変わらずの和装だが、都会風の桃色のショールを羽織っている。
鏡が入ってくる。
窓が開いていることに気が付くとあわてて閉じて、カーテンを閉める。蓄音機の音量を下げる。

鏡　音が大きすぎる。
踏子　ご近所迷惑でしたかしら。
鏡　このレコードは発禁になってるんだ。持っていることがばれたら大変だ。このホテルも、昔と違って今はお客もいるんだから。
踏子　でも私はこのレコード聴くんが、年に一度の楽しみなんです。ほら。（封書を見せる）
鏡　また、ファンレター書いたの。
踏子　はい、筆が止まらなくて。（ジャケットを見て）浅草の歌姫鳥山唄子遂にデビュー「今度出会えたら」（裏返し）大正９年。
鏡　桜の咲きはじめに発売して、葉桜のころには発禁になってしまった幻のレコードだ。
踏子　フランス語があきませんのん？
鏡　いや、日本語の歌がいけなかった。このレコードは前の年に亡くなった松井須磨子さんへの追悼の意味もあった。唄子さんは彼

女の一番弟子だったからね。日本の発禁第1号のレコードは、須磨子さんが大正6年に出した「今度生まれたら」。その中の何曲かを、唄子さんは自分のレコードに入れた。一度発禁にした曲をまた発売するなんて、お上はカンカンになった。

踏子　それで。

鏡　即発禁さ。この詩がだめ、この小説がだめ、この歌がだめ、だめだめばかりで息苦しい世の中さ。

踏子　そのうち、俳句も。

鏡　まさか（笑）、五・七・五の有季定型。十七音の中に花、鳥、風、花鳥風詠を閉じ込める。自分の気持ちを物に託す、物で表現する、それが俳句だ。本物の俳人は、一句の中に巧みに自分の心を忍ばせる。いかに隠すかが腕の見せ所なんだ。心情をそのまま書いてしまうようじゃあ、その俳人は二流だね。

踏子　いつか、コロッケの歌も歌えなくなるんですやろか。

鏡　コロッケ？

踏子　ええ、私あの歌大好き。

♪『コロッケの歌』益田太郎冠者作詞／作曲者未詳

ランララララララ　ランランラン
ワイフ貰ってうれしかったが
いつも出てくるおかずはコロッケ
今日もコロッケ　明日もコロッケ
（鏡も一緒に歌う）
これじゃ年がら年中コロッケ
アハハハアハハハ　こりゃおかし

鏡と踏子、笑い転げる。

踏子　鏡先生、どうしましょう。

鏡　（笑いながら）なんだい。

踏子　コロッケが食べとうなってきました。

鏡　困ったな、僕もだよ。

鏡と踏子、噴き出す。

鏡　麦田に連絡をしよう。近くの洋食屋から黒猫まで、コロッケを届けさせるんだ。

踏子　また、麦田さんそんな風に使いはって。

鏡　いいんだ。あいつは俺の弟みたいなものだから。案外今頃、唄子さんも一緒かもしれないな。ようし、今夜はみんなでコロッケを食べて、『コロッケ』の唄を歌おう。そして、今日の席題もコロッケだ。

踏子　コロッケで俳句？

鏡　コロッケでも俳句は作れる、コロッケに愛があれば。

踏子　唄子さんと麦田さんて、本当にお似合い…

鏡　芸術家同士だからね…

踏子　麦田さんは印刷屋さんでしょう？

鏡　まあね。でも、あいつはもともと演出家志望だったんだ。脚本も、俳句も書く。それが、兄貴を兵隊にとられて、家業をつがなきゃならなくなった…おかげで僕は助かってるけどね。格安で本が作れる。

踏子　鏡先生は、いっつも値切りはる。

鏡　僕も、近江商人になれるかな？

踏子　売り手よし、買い手よし、いう言葉をご存知ですか？

鏡　聞いたことないな。

踏子　近江の商人は、決して商品が持っている価値より高うも、安うも売ったりせえしまへん。長い目で見たら、お客様の信用を失

うことを知ってるんです。
鏡　安売りはしないんだね。
踏子　でも、ぼったくりもせえしまへん。
鏡　（ショールを手にし）これも、君んところの会社で作ったの？
踏子　もしかしたら、そうかもしれまへんなあ…
鏡　もしかしたらって。
踏子　東京のデパートで買うたんです、高いもんですなあ。
鏡　そんなもの、いくらでも作ってるんじゃないの。
踏子　質素倹約。まわりからねたまれんよう、目立たへんよう、家訓のひとつです。まさか、こんな桃色のショール着て帰ったら、なんて言われますやろ。これは、今だけの私。
鏡　ご主人は、元気。
踏子　なんとか。
鏡　あの時は驚いたね、総会の途中でキトクの電報…
踏子　大げさな人なんです。
鏡　今も、ああいう風に？
踏子　身体が弱いんは昔からですけど。そやのに、お酒もたばこもやめしません。あれ以来時々、猛烈に頭が痛うなるんですわ。そのたびに、死ぬ、死ぬ、いうて。
鏡　関係あるのかねえ。
踏子　先生、あの時、正直ほっとしはりましたやろ。
鏡　そんな意地悪いえるようになったとは、立派になったもんだ。
踏子　ふざけんとってください。
鏡　でも、こうして毎年総会で会える。
踏子　まるで織姫と彦星。
鏡　一年に一度だけ、か。

鏡、踏子を抱きしめる。

鏡　昔は近江から京都へ出てくるのも許してもらえなかったのになあ。
踏子　おしゅうとさまが亡くなって。取引先へのおつかいも兼ねる、いうことで、交換条件です。主人は身体が弱いですさかい、私が仕事を任されることも。そや、鏡先生に見せなあかんもんがありますねん。

踏子、バッグから雑誌「女人芸術」を取り出すと鏡に渡す。

踏子　連載、することになりましてん。
鏡　すごいじゃないか、おめでとう。「女人芸術」。（ページをめくり）林芙美子、吉屋信子…ここに名前が載るなんて、いっぱしの女流文学者みたいじゃないか。で、どんな連載？
踏子　「今日の台所」。
鏡　台所？
踏子　ええ、お野菜とか、お魚とか…台所にちなんだ季節の一句を取り上げるなかで、旬のお料理の作り方なんかも紹介するんですわ。
鏡　旬の、お料理。
踏子　ほんまに小さい欄ですけど。鏡先生、喜んでくれしませんのん？
鏡　喜んでるよ、喜んでるさ。でも。
踏子　でも？
鏡　それじゃ、文学者というより料理研究家だよ。
踏子　お台所でも、立派に俳句はできます。
鏡　台所なんて、あんな狭くてじめじめした場所で俳句が作れるもんか。

踏子　そやかて、台所には季節の野菜が揃います、春、夏、秋、冬、作る料理は全部違います、水加減も違います、お漬けもんの具も違います、梅干しかって六月にしか漬けられません。
鏡　そんな、むきにならなくても。
踏子　私は、一日のほとんどの時間を、その、狭くてじめじめした場所で過ごしてるんです。
鏡　…
踏子　女の俳句は、忙しい家事のなかでしか作れません。私は、薄暗い台所に差しこんできた、一条の光を俳句にしているんです。男の鏡先生とは違います。
鏡　それは、社会に出ようとする努力をしないからさ。
踏子　社会？ほな、いわしてもらいますけど、立派に社会に出てる先生の俳句があれですか。
鏡　あれとはなんだよ。
踏子　「踊り子の足、さわれども、さわれども、むなし」
鏡　それ、どこで。
踏子　新聞で読みました、よく載せてもらえたこと。先生、いったい何回触ったんですか。
鏡　按摩してあげてたんだよ。君にもしてあげたじゃないか。
踏子　こんなのもありました。「便所から豚、見えてぶーぶーぶー」
鏡　あれは、子供向きだ。
踏子　意味がわかりません。季語もない、五、七、五、も守らない、私は恥ずかしい。
鏡　つまらない。君も、ほかの同人と同じことを言うんだな。
踏子　花鳥諷詠こそ、俳句です。
鏡　新しみもまた俳諧の花だ、このままじゃ俳句は黴の生えた文芸になり下がってしまう。
踏子　「新しみ」？もしかして、あの、下品な句もですか。
鏡　下品な句？
踏子　まさか、夫婦生活のことまで俳句にするやなんて。
鏡　読んだのか。
踏子　…
鏡　ごめん。
踏子　謝るなら、奥様に。
鏡　妻は、知ってるよ。
踏子　え。
鏡　あの連作のことは、とっくに許してる。

ドアをノックする音。

鏡　迎えだ。
踏子　…
鏡　来ないの。
踏子　私のことは、俳句にしてくれませんの。
鏡　誰だかわかるように書くのは、二流の俳人だよ。

鏡、出ていく。

踏子（さみしげに歌う）
♪ランラララララララ　ランランラン
ワイフ貰ってうれしかったが
いつも出てくるおかずはコロッケ
今日もコロッケ　明日もコロッケ
これじゃ年がら年中コロッケ
アハハハアハハハ　こりゃおかし

踏子、「女人芸術」をドアに投げつけ…溶暗。

―三場

二場から3年後
昭和7年（1932）4月／東京浅草アサヒホテル５０１号室
午後7時
鏡千里38歳
五所踏子28歳

部屋は、鏡の私物が消え、本来のホテルの一室に戻っている。蓄音機が残っているのは、もともとこのホテルの備品だったのだろう。
トランクを持った鏡が、今まさに出ようとするところ、上京してきた踏子が現れる。
モダンな銘仙の着物に二場で身に着けていたショールをひっかけ、パーマをかけている。

踏子　（鏡に詰め寄り）取り消してください。
鏡　総会は明後日だ。
踏子　あんまりやないですか。
鏡　したがって黒猫の句会は今日じゃない。
踏子　（バッグから、俳誌「黒猫」を取り出し、ページを見せ）
　私は、「はい」と言うた覚えはありません。
鏡　もっとも、定例句会は曜日を変えたから明日でもないが。
踏子　巻頭一ページ。
鏡　それに、今日君をここに呼んだ覚えもない！
踏子　五所踏青女史を除名ニス！先生！
鏡　（「黒猫」を奪い）君を、連れて出るべきじゃなかった。
踏子　そのことやったらええんです。
鏡　「そのことやったらええ」？僕は、君に許してもらわなくちゃならないのか。
踏子　そんなつもりや。
鏡　言い換えよう。君を、連れて出るつもりじゃなかった。
踏子　…！
鏡　「ホトトギス」を出るのは、僕ら新興俳句の連中だけのつもりだった…それを、何を勘違いされたのか、虚子先生は…君まで除名してしまった。
踏子　私は、それで本望でした。
鏡　君を「黒猫」に誘ったのは、仕方なしにだ。
踏子　私は、うれしかった。新しい俳誌、希望にあふれて。
鏡　でも君はどうだい、僕らの結社に入っても、相変わらずお台所の俳句ばかりだ。
踏子　お台所でも、俳句は出来ます。
鏡　そればかり、もう聞き飽きたよ。
踏子　鏡先生がおっしゃったんです。自分の気持ちを物に託す、物で表現する、それが俳句だ。本物の俳人は、一句のなかに自分の心を隠す。
鏡　そのとおり。だが、世の中は移り変わり、未知の可能性にあふれてる。僕ら俳人も、古い形式を壊し、新しい俳句表現を作り出していかなくちゃ。それに。
踏子　それに？
鏡　君は、意地になってるんじゃないのか。
踏子　どういうことですか。
鏡　「台所俳句は二流の俳句だ」
踏子　尾崎鉄工さんのことですか。
鏡　張り合うのもいいかげんよさないか。
踏子　張り合うやなんて。向こうが勝手に。
鏡　勝手に？

踏子　いいがかりを…
鏡　選評はするだろうさ。それをいいがかりなんて。
踏子　あの人は、私が鏡先生の特選を取ったのがよっぽど腹立たしかったんです。
鏡　君は、いつの話をしてるんだ。
踏子　ええ、随分前の話です。
鏡　「黒猫」が創刊して1年後だったか。君が特選を独り占めしたのは。
踏子　独り占めやなんて。
鏡　2号連続、巻頭を飾った。
踏子　「黒猫」の選考では、名前を伏せて投句された俳句を、鏡先生が選ぶ。
鏡　入会して1年、君はめきめき腕前をあげた。題材から台所は一切消えた。
踏子　あの頃は、みなさんについていくのに必死でした。
鏡　そのために封印したんだろう。
踏子　決して台所の事は書くまいと心に誓いました。
鏡　君には天性のカンがあった。
踏子　まるで昔話みたいに。
鏡　昔話だよ。君に新興俳句の才能があるなんて、全く僕の勘違いだったからね。あの日を境にコロッとまた、もとの台所俳人に戻ってしまった。トランプの表と裏をひっくり返すみたいに。女の移り気にはほとほとあきれるよ。
踏子　あの日。
鏡　尾崎と大喧嘩した日の事だよ。
踏子　喧嘩やありません。議論です。
鏡　驚いた、君も参政権が欲しいのか。
踏子　あきませんか。
鏡　いや、とてもいいことだ。それだけでも、「黒猫」にいた甲斐があったよ。そんな革新的な婦人が台所のことばかり書くなんて、僕には理解できないね。君の頭の中はごちゃごちゃのおもちゃ箱だ。表現者として全く整理が出来ていない。
踏子　先生は、私の俳句をどうお思いなんですか。
鏡　「ホトトギス」でなら評価もされるかもしれない。けれど、「黒猫」のなかに君の俳句が載っていると、途端に我々の士気が下がるのも事実だ。
踏子　同じ方向を向けと、いわはるんですね。
鏡　そのための結社だ。
踏子　あの日の句会で、鉄工さんはこう言いはった。覚えてはりますか。「我ら新興俳句に」…
鏡　「新興俳句に、台所はいらない」こうだね。
踏子　まだ、続きがあります。「野菜の事、魚の事、肉の事、米の事を、我々は、題材から捨てなくてはいけない」
鏡　それに君が異論を唱えた。
踏子　「それは、野菜や、魚を育てる、土も、水も、捨てろという事です。肉を、米を、食べて養われる、女や、子どもを、置きざりにせよという事です」
鏡　鉄工は激怒した。「そんな事を言いだしたら、いつまでたっても前に進めないではないか」
踏子　私は言いました。…先生。
鏡　なんだい。
踏子　なんやまどろっこしいです。私は、私の役をやりますさかい、先生は鉄工さんの役をやってください。
鏡　ちょっと、待ってくれよ…

踏子、句会の位置を再現する。

踏子　「鉄工さん、あなたは生き物を殺したことがありますか」

うながされ、鏡もしぶしぶ踏子の再現に従う。

鏡　「僕が残虐な人間とでもいいたいのか」
踏子　「殺すことが残虐だというなら、私はこのなかで、最も残虐な人間です」
鏡　「五所さんは、殺したことがあるのか」
踏子　「ええ、毎日」
鏡　「毎日？」
踏子　「いのちあるものを殺したり、切り刻んだり、煮たり、焼いたりして調理するのがお台所です。私は毎日、私たちが食べて生きていくために、殺しています」
鏡　「鶏も絞めた事が無いような顔をして」
踏子　「でも、魚ならさばき方を知っています」
鏡　そして君は、鯉の三枚おろしのやりかたを延々を話しだした…
踏子　「まずは尾ひれから肉に包丁を入れていきます。次に骨にそって、頭の付け根まで裂いていきます。それから、頭をざっくり切り落とします…」
鏡　句会は、料理教室じゃない！

鏡の一声で、再現が終わり…

踏子　私、あの時わかったんです。「黒猫」に入会してからずっと、みなさんの目指す俳句を追いかけて、追いかけて、でも、なんかが違うとずっと思てました…
鏡　何が違ったんだ。
踏子　…
鏡　僕は君を責めたりなんかしないよ。
踏子　この人たちは、ほんとうに、命というものを知らない…
鏡　命のとらえ方が異なるだけさ。
踏子　せやったら、私には私のとらえ方があります。その事を、知ってほしいと思てるんです。
鏡　それで意地になって台所の俳句ばかり書くようになったのか。
踏子　何や、私には、今の新興俳句には一番大事なことが欠けている気がしてならないんです。
鏡　だから言ってるじゃないか。「ホトトギス」のほうが、君にとっては書きやすかっただろう。ほら、「台所雑詠」という欄があるじゃないか。
踏子　「台所雑詠」。
鏡　女性にしか投句出来ない欄だ。
踏子　…
鏡　女は、台所に戻りなさい。
踏子　台所の事を書かなければ、「黒猫」に戻れるんですか。
鏡　そんな簡単な話じゃない。
踏子　他にも理由があるんですか。
鏡　…
踏子　教えてください。
鏡　そのうち聞こえて来るよ。
踏子　先生の口から聞きたいんです。
鏡　君は確かに台所の事は知っているかもしれない。野菜や、魚の事は知っているかもしれない。けれど、人間のことはどうだ。今のこの国の政治や、産業の事はどうだ。知っていると言えるのか。
踏子　それは…
鏡　君のご主人は…確か紡績工場を持っていたね。
踏子　ええ。
鏡　それはどこにあるか、知ってるのかい。
踏子　確か、湖の南側に。

鏡　行ったことは。
踏子　ありません。
鏡　きっと、そこでは年端もいかない少女たちが女工として大勢働いているだろう。たいてい、貧しい農家や、訳ありで流れ着いてきた女性たちだ。
踏子　…
鏡　幾らくらいなんだろうね、彼女たちの一日の賃金は。
踏子　…
鏡　君が着ている美しい肩掛けなんて、一生買えやしないんだよ。
踏子　私に、何が出来るっていうんですか。
鏡　尾崎は、君がそうして美しく着飾って、家のおつかいで上京してくることを批判しているんだ。
踏子　私の知らないところで…
鏡　たまたまさ。君は毎月句会に出られるわけじゃなかったから。
踏子　先生は、ずっとご存じやったんですね。
鏡　わかってほしい。僕はこんな事を言って君を打ちのめしたい訳じゃないんだ。

鏡、鞄から封書を取り出す。

鏡　五所さん、これを。
踏子　なんですか。
鏡　虚子先生への手紙だ。
踏子　え。
鏡　「ホトトギス」の総会に、顔をだしなさい。
踏子　でも、私は除名に。
鏡　もともと君の除名に重みはない。そこに、君と僕とは関係ないと書いてある、結社「黒猫」は君と決裂した。
踏子　そんな。
鏡　今日と、明日はここに泊まりなさい、今月いっぱいはまだ僕が借りてる。
踏子　今月、いっぱい？
鏡　アサヒホテルも賃料が高くなってね、出ていくことにした。
踏子　先生。私たち、これからどこで会えば…
鏡　これきりだ。
踏子　え。
鏡　君は、破門だ。
踏子　…
鏡　五所さん、これきりにしよう。
踏子　私たち、もっと話し合えないんですか。
鏡　これ以上、どうするっていうんだ。
踏子　まだ、話し足りないことがあるはずです。
鏡　よそう、野暮なことは。

鏡、ドアまで行くと立ち止まり

鏡　僕の荷物で残っているものがあったら捨ててください、もういらないものだから。
踏子　理由は、まだあるんでしょう。本当の理由。先生…先生はあの噂を気にして…

鏡、扉を閉めて出ていく。

踏子　「鏡は、人妻を囲ってる」…！あなたはいつも、本当の事を言わへん。いいえ、あなただけやない。俳人は、みんな…！

踏子、打ちのめされて暫く動けない。
やがて、蓄音機の上にある鏡の忘れものに気づく。
それは唄子のレコード『今度出会えたら』―
踏子、レコードをかける。

♪『こんど出会えたら』

今度出会えたら　鳥をつれておいで
鳥はよいもの　市場へいって
そこできれいな鳥籠買って
かわいあの子と歌って暮らそ

今度出会えたら　サイコロもっておいで
サイコロよいもの　双六書いて
そこで人生いくつも生きて
かわいあの子と朝まであそぼ

今度出会えたら　子供のままでおいで
子供よいもの　野原へいって
そこでたこあげ鬼ごっこ
かわいあの子とずうっといっしょ

溶暗。

■二幕
―一場

一幕から8年後
昭和１５年（1940）２月／東京浅草キャバレー「黒猫」
午後7時
鏡千里46歳
五所踏子36歳

鳥山唄子デビュー20周年パーティの日。
『カチューシャの唄』の前奏と共に、ドレス姿の鳥山唄子（鏡が扮している）が派手に登場する。

唄子　今日は鳥山唄子、デビュー２０周年のお祝いに駆けつけてくださり、心から感謝いたします。そして、この祝いの席を企画してくれましたあたくしの夫、麦田一畝…

麦田（踏子が扮している）が登壇する。

唄子　本当にありがとう…モン・シェリ…愛しい人…

唄子は麦田にキス。麦田照れながら客席へ去る。

唄子　今日は日ごろのもやもやをぱーっと忘れて、歌って、踊って、大いに楽しんで。（『酒場の歌』の前奏が流れ）この日まで、あたくしがどうにか歌い続けて来られましたのは、まだ若いころに先生を失ったせいかもしれません。「先生に比べれば、まだまだだ。」「先生ならどうおっしゃるだろう。」「先生なら、どんな人生を？」心にぽっかり空いた大きな穴を、なんとか埋めようとして生きてきた２０年でした。あたくしが先生とご一緒いたしましたのは、ほんの３年ほどのことでした。けれど、一日として忘れたことはありません。田舎から出て来た１５歳のあたくしを、先生は「小芋ちゃん」と呼んで可愛がってくださいました。あたくしも、先生のことを、姉とも、母とも慕い…幸福でした。今日は、たった

一人の、あたくしの先生、あたくしのお師匠様、彼女の歌った歌を。先生、聞いてしてけろじゃ。

♪『酒場の唄』北原白秋作詞／中山晋平作曲

ダンスしませうか
骨牌切りませうか
ララランラ、ララランラ、ララララ
赤い酒でも飲みませうか

ピアノ弾きませうか
笛吹きませうか
ララランラ、ララランラ、ララララ
赤い月でも待ちませうか

闘牛見ませうか
花投げませうか
ララランラ、ララランラ、ララララ
赤い槍でも振りませうか…

階上から、どたばたと激しく特高警察が乱入してくる足音。

店員１（声）　特高だ。
店員２（声）　逃げろ。
店員１（声）　出口をあけろ。

急に電気が落ちる。店員が落としたのである。

鏡（声）　麦田！
唄子（声）　…五所さんッ。
特高１（声）　麦田ーッ、どこだーッ。

人々の悲鳴や怒声、足音が暗闇のなかで錯綜する。
電気が点く。
唄子、再び歌い始める。

唄子
♪（続き）
女賭けませうか
玉突きませうか
ララランラ、ララランラ、ララララ
赤い心臓でもあげませうか

来場客も歌いだす。
唄子の声に歌声が重なる。

特高１（歌と並行して声）　歌うな、歌うなーッ、アカの集会は禁止だーッ。

唄子・来場客
♪（続き）
さあさ退散けませうか
まアだ飲みませうか
ララランラ、ララランラ、ララララ
赤い橇にでも乗りませうか…
ララランラ、ララランラ、ララララ…

怒号のような歌声が高まってゆくなか、一発の銃声。
歌、一瞬にして止んで、悲鳴。
溶暗。

―二場

一場の翌日
昭和１５年（1940）２月／東京浅草アサヒホテル５０１号室
午後７時
鏡千里46歳
五所踏子36歳

ゆっくりと室内が明るくなると、そこは東京浅草アサヒホテル５０１号室の客室である。
カーテンが外からの風でひるがえっている。
スーツ姿の麦田が、ぐったりと椅子に腰かけている。
胸ポケットに、赤い椿の花を一輪差している。
突然誰かがドアをノックする。麦田は身構える。
しばらくしてノックは止み、がちゃがちゃと鍵を回す音。
麦田はあわてて逃げ場を探すが見つからず、窓から脱出しようとする。
鏡が入ってくる。

鏡　麦田、僕だ、鏡だ、鏡千里だ！

麦田が振り返る。

鏡　五所さん？

スーツの男は、麦田ではなく踏子であった。

踏子　お久しぶりで、ございます。（深々と頭を下げる）
鏡　いや、挨拶はいいから。
踏子　先生、お痩せになりはって。
鏡　君、その恰好は。
踏子　麦田さんの背広です。
鏡　麦田は。
踏子　（窓のほうを見て）今夜は、満月なんですね。
鏡　（麦田が窓から逃げたことを察する）…
踏子　鍵を。
鏡　（内鍵を掛ける）昨日は、君も来ていたのか。
踏子　列車が遅れて、途中から。唄子さんは？
鏡　（新聞を投げ出す）
踏子　浅草の歌姫鳥山唄子逮捕。何もしてへんのに。
鏡　麦田を逃がした。
踏子　それに、警察が発砲したことがちっとも書いてない。
鏡　新聞はいまや真実を語らない。なぜ君がここにいる。
踏子　この部屋に宿を。先生、鍵をどうして？
鏡　僕の顔を見たら、主人が渡してくれた。
踏子　ここには良く？
鏡　いや、８年ぶりだよ。君は？
踏子　私もです。
鏡　これ、唄子さんが僕に。（紙切れを踏子に渡す）
踏子　（読む）「アサヒホテル５０１」
鏡　五所さんの字だね、気づかなかった。
踏子　遅れてきた私は、舞台袖のカーテンに隠れていました。唄子さんは私がそこにいることを知ってはりました。せやから、歌の途中で電気が消えて警察が押し寄せてきたとき、唄子さんはすぐ

に私を呼んで、「麦田を逃がして」と言いはったんです。私は持っていた句帳のきれはしに部屋の番号を書いて唄子さんに渡しました。

鏡　「アサヒホテル５０１」それを僕が受け取った。

踏子　みなさんが歌っているうちに、私は麦田さんを連れて出ることに成功しました。

鏡　唄子さんは、麦田を逃がすために自分が捕まったんだ。歌い続けて。

踏子　まさか、みんな歌いだすやなんて。

鏡　麦田はいまどこに？

踏子　（首を横にふる）とりあえず暫くはここにいるつもりやったんです。ほとぼりがさめるまでは土地勘のある地元で息をひそめて嵐が過ぎるのを待つ。それが麦田さんの持論でしたさかい。せやけど警察の聞き込みがきて。ホテルのご主人が教えてくれはったんです。それで窓から逃がしたんです。それもご主人が、麦田さんは浅草では有名人やからすぐばれる、いいはるさかい、女装をさして。

鏡　そういえばやけにがっちりした女が猛スピードで走って行った。余計に目立つじゃないか。

踏子　でも、先生も麦田さんてわからへんかったんでしょ、ほな成功やわ。よかった。

鏡　それでその恰好か。

踏子　交換したんです、洋服で良かった。

鏡　君の洋服姿なんて想像できないな。

踏子　これも洋服ですやろ、似合うてます？

鏡　どうして舞台袖に？

踏子、胸に差していた一輪の赤い椿をテーブルに置く。

踏子　一輪になってもうたけど、頼まれてたんです。

鏡　頼まれた？

踏子　唄子さんに。お祝いは何がいいか手紙で聞きましたら、私の家の寒椿を、ぜひ観たいと。

鏡　近江から。

踏子　私と、唄子さんにとっては、特別な花なんです。

鏡　この小さいのが。

踏子　私…猫を飼ってたんです。

鏡　猫？

踏子　ほんの子猫です。もともと弱かったんでしょう、生まれたばかりで、すぐに死んでしまいましたけど。悲しくて、悲しくて、きっとこの仔は、死なせてしまった私のことを恨んでるやろうなあと思うたら、もっと悲しくて。そのことを唄子さんに書いて送ったら、庭に、花の咲く木を植えなさいとお返事が来ました。その花が咲いたら、子猫があなたに会いに来た証やから、あなたを恨んだりなんかしてない。それまで、一生懸命育てなさいって…、そんな歌が西洋にあるんですって。

鏡　それで椿の木を。

踏子　ただの歌ですから、ほんまかどうかわかりません。きっと唄子さんは、木を育てる事が、私のなぐさめになると思いはったんでしょう。それがようやく、去年咲いたんです。何度か植え替えたもんですから、育ちが悪くて…まだ鉢植えに出来るくらいの小さい木です。（新聞を見て）ぎょうさん捕まりはったんですね…

鏡　アカの集会だってさ。

踏子　唄子さんのお祝いで集まることが？

鏡　大合唱の歌にイチャモンをつけられた。（歌う）「ラランラ、ラランラ、ラララ、赤い酒でも飲みませうか…赤い月にでも待ちませうか…赤い橇にでも…」

踏子　そんな。

鏡　言いがかりは集会だけじゃない。国家総動員法が２年前に制定されてから、出版物への規制も更に強くなってきている。「女人芸術」だって。
踏子　まさかと思いました。美味しい梅干しのつけ方を紹介する前でした。
鏡　それでも一部、発禁になった俳誌を麦田は裏で印刷していた。警察は知っていた。ずっと狙われてたんだ。
踏子　麦田さんが目ぇつけられはったんは、俳人やからという理由ではないんですね。
鏡　いや、僕ら新興俳人は今、取締りの格好の標的になってる。
踏子　いつか先生は、俳人がつかまるなんてありえないって。
鏡　僕らは、五、七、五の定型も、季語も、すべて壊してきた。否定じゃない、壊すところから新しい俳句を探ってきたんだ。ところが今、全ての前衛芸術はそれを作り出す人間と共に一掃されようとしている。
踏子　どうして。
鏡　政府は、芸術家の想像力が恐ろしいのさ。
踏子　想像力が？
鏡　自分で考えることの出来る力ってことさ。右へ倣えしない人間は、兵隊に向かない、お上にも従わない。
踏子　俳句は、芸術なんかやありません。
鏡　（笑い）君は、そう思っているのか。
踏子　いけませんか。
鏡　確かに、君の言うとおりかもしれないな。たった十七音、芸術ですらないもので僕は闘おうとしている。実に愉快な挑戦だ！
踏子　先生、新興俳句は前衛やからあかんのでしょうか、そうやないでしょう。もっと理由は別のところにあるんとちゃいますか。
鏡　ほかに理由なんてないよ。
踏子　先生は、変わりはった。
鏡　８年前はもっと色男だったかね。
踏子　いまのあなたの目、鷹のように鋭くて恐ろしい。昔は梟のように賢くて穏やかだったのに。
鏡　踏青女史は動物を見る目が無いようだな、どちらも同じ猛禽類だ、生臭い獣だよ。君は、鳥の句は詠まないほうがいい。
踏子　鳥の話をしているんやありません。
鏡　そうさ、俳句の話さ。
踏子　見た目だけやありません。先生の俳句は、変わりました。
鏡　除籍にした当時から、僕と君の俳句は違った。
踏子　いいえ、先生の俳句が変わったのは昭和１３年からです。ほんの２年前です。
鏡　君は、ずっと読んでいたのか。
踏子　唄子さんにお願いして、「黒猫」は欠かさず送ってもらっていました。先生、何があったんですか…
鏡　…
踏子　先生が言いはったんです。本物の俳人は、一句のなかに巧みに自分の心を忍ばせる。心情をそのまま俳句にしてしまうのは二流の俳人やと。先生がいま書いてはるのは何ですか、二流も二流どころか、三流のなれの果てです。
鏡　それが、かつての弟子が下した今の僕に対する評価か…
踏子　先生、あんな俳句を書くんはやめてください…あんなもん。先生は、自分で自分を追い詰めてるんです。
鏡　踏青女史、僕の俳句はそんなにわかりやすいかね。
踏子　昭和１２年に、先生は漢口へ行かれましたね。
鏡　ペン部隊のことか。
踏子　陸軍の報道班員として参加したのは、林芙美子、久米正雄、鏡千里、ほか数名。それまでは、先生とお国の関係も良好やった。

でも、帰国後、先生の俳句はがらりと変わっていた。
鏡　発表後は、会員もずいぶん減った。
踏子　あなたはいつも、誰も思いつかないような俳句をお書きになった、型破りではらはらするほどの。それでも心は、花に、鳥に、空に、何か別のものに巧みに隠されていた。直接的に政治を書く事なんかなかった。
鏡　戦場のことを書くのはそんなにいけないか。
踏子　戦場のことを書くのがあかんというてるんやありません、戦争に反対してるのが危ないというてるんです。
鏡　君は賛成しているのか。
踏子　まさか。でも、林芙美子さんは南京陥落にひきつづき漢口にも一番乗りされて、今や大スターです。
鏡　彼女は抜け駆けして一番のりだった。僕は乗り遅れて最後だった。俳人は歩くのが遅いんだ。どうしてだかわかるね。
踏子　道草ばかりするからですか。
鏡　そのとおり、道端に小さな花でも咲いていれば腰をかがめる、木の実が落ちていれば集めだす、虫が脱皮していればポケットに殻を拾う、若葉の芽吹きがあれば触れずにはいられない、そして、一句ひらめくと出来上がるまでじっとそこを動かない。
踏子　ぜんぜん前に進まへんのは、俳人は皆おんなじです。
鏡　支那でも、僕はいつもビリだった。それに、人とは違う俳句を探そうと思ってね、いつもの癖さ、路地裏や小さな村の奥へもわけいるものだから、迷子になることもたびたびあったよ。進軍から数日遅れて、僕は漢口に入った。季節は秋で、紅葉が赤く燃えていた。前日に雨が降ったものだから、道がぬかるんでいてね、車に乗っていたのが進まない。少しとめて休憩をしていたら、蛙の鳴き声がした。ぬかるみに、確かにちいさな雨蛙がいて、ぴょんと路地裏に飛んで行った。こんな秋に蛙の鳴き声をきくなどめずらしいと思って、僕はあとをついて行った。壊れた建物のあいだを抜けていくと、肉の焼けたような、むっとした嫌な匂いがした。すると小さな広場があってね、古い町なんだろう、太くて立派な樹が植えてあったよ。そしてね、そこには裸になった人間の身体の一部が、手だけになったり、首だけになったり、胴体をえぐられたりして、ぶら下がったり、結わえつけられたりしていたよ。まるで子供が蛙をもて遊んだみたいに。生きているものはなにもなかった。蛙は本当にいたんだろうか、あの鳴き声みたいに聞こえたのはなんだったんだろう、生きてるものはなにもなかったのに、生きてるものはなにもなかったのに。

鏡、床にうずくまってしまう。

踏子　誰が、そんなこと。
鏡　お国の兵隊さ！立派なお手柄だよ、死人を相手に。生きるものの、のない場所で、季節によりかかる俳人に何が書ける。花も、鳥も、風も、みな死んでいる。
踏子　それでも、死を、生きとし生けるもののなかに書くのが俳人やないですか。
鏡　僕は、ありのままを書いている！
踏子　支那人の死体も、おびただしい蝿も、流れる血も、焼け焦げた肉の匂いも、瓦礫になった町も、私には、俳句にすべきことは思えません。
鏡　五所さん。なぜ人間には季語が無いんだ。僕ら俳人は、この世に生きるものすべて、動物にすら季語を与えるのに。
踏子　それを見ているのが、人間だからではないですか。生きるものも、死ぬものも。季節を名づけられるのは、それを見ている人間だけです。私から見れば…今の先生は冬です。葉っぱに心の中

の言葉すべて詰め込んで、身体からこそげ落としてしまった、
枯れ木です。
鏡　枯れ木。
踏子　だから先生、少しお休みになるんです。
鏡　休む？
踏子　季節はめぐります。先生の身体にも、また春が訪れます。
もう一度芽吹くために、いまはお休みになるんです。
鏡　見たものを書き尽くすまで、僕は休めない。これが僕の表
現だ。
踏子　書き尽くすために、休むんです。こんな、骨と皮だけに
なって、何が書けるんです。

踏子、鏡の身体をなでる。
鏡、じっとして踏子の手の感触を感じている。

鏡　君は、あたたかいな。まるで春だ。

鏡、踏子の身体をまさぐり、ぬくもりを感じ取る。

鏡　僕らは、所詮動物だ。普段は、動物の自分をおさえつけて
いる。だから、人間として生きられるんだ。戦争は、人を獣
にする。そこではどんな人格者も、猪や、熊以下の、けだも
のになってしまう。僕も獣だ。僕のなかに獣がいる。ならば
いっそ、この皮膚をはがしてしまいたい。化けの皮をはがし
て、獣そのものになってしまいたい。こんな四角い建物から
逃げ出して、森か、野原で、獣として暮らしたい。君も、来
てくれるか。
踏子　先生。
鏡　だめかな。
踏子　いいえ。私たちきっと、もうとっくに走り出していたんです。
あの満月の真下を目指して。

踏子、鏡を押し倒し…溶暗。

―三場

二場の翌年
昭和１６年（1941）２月／東京浅草アサヒホテル５０１号室
午後７時
鏡千里 47 歳
五所踏子 37 歳

洋装の踏子が書斎机に向かい原稿を校正している。
足元には小型のトランクとバッグが一つ。
机の上には新聞が山積みに重ねてある。その隅に一輪挿しの
赤い椿の
花。
紙袋を下げた鏡が入ってくる。

鏡　ごめん、まだ書いてた？
踏子　もう校正も済みました。
鏡　早いねえ。
踏子　早う書かんと、せっかくの連載が逃げてしまいますから。
鏡　これ、君に手紙だって。（住所を見て）東京都赤坂…お屋敷街だ
ね。

鏡、踏子に封筒を渡す。

踏子　へえ、知りませなんだ。
鏡　ホテルみたいに大きな家が標本みたいに並んでるよ。まるで家の
博覧会さ。
踏子　お台所も広いんですやろか、大変やわ。
鏡　そうだね。もっとも、そんなところは女中さんが沢山いるんだろ　うけれど。

踏子、受け取った封筒を大事にバッグに仕舞うと、書きあがった原稿を封筒に入れ、切手を貼る。
鏡、新聞を取り上げながら、

鏡　酪農新聞…漁業新聞…生花新聞…いろんな新聞があるもんだねえ。
踏子　西日本看護婦新聞、なんていうのもありました。私も、調べてみるまでこんなに専門誌があるやなんて知りませんでした。
鏡　そして今は。
踏子　信濃農業新聞。（鏡に渡す）
鏡　「今日の台所」。
踏子　「女人芸術」が発禁になってから、死にものぐるいで次の連載先を探しました。ようやく世間さまに出せた私の文章。絶対にやめるもんか、思うて。
鏡　執念だねえ。
踏子　怖いですか。
鏡　怖いねえ。踏青女史は、そんなだったかねえ。
踏子　先生、人は変わります。
鏡　無理しなくていいんだよ。
踏子　無理なんて。
鏡　ねえ。
踏子　はい。
鏡　（考えて）今夜は、何が食べたい。
踏子　（笑う）
鏡　可笑しいかな。
踏子　本当は、違うことが聞きたいんでしょう。
鏡　え。
踏子　先生は、本当に言いたいことにたどり着くまでに、三回くらい別の質問をしはるんです。
鏡　まいったな。
踏子　さあ、次はなんですか。
鏡　明日は晴れるかな。
踏子　ええお天気です。
鏡　それは良かった。こう風が強くちゃたまらないからね。…なんだか、随分昔に君とこんな話をしたような気がするよ。
踏子　ほんまですか。
鏡　うん。…ねえ。
踏子　はい。
鏡　どうして家を出たの。
踏子　…
鏡　ごめん、やっぱり天気の話をしよう。
踏子　私から出て行ったわけやないんです。離縁されたんです。
鏡　え。
踏子　追い出されました。
鏡　ご主人に。
踏子　お舅様に。まだお元気で。
鏡　俳句が原因？
踏子　まあ、そんなところですわ。私、先生に破門されて近江に戻

ってから、主人の紡績工場に行ってみたんです。色々あって、何年か経ってからになりましたけれど。

鏡　それで。

踏子　先生や尾崎さんが言うてはったように、沢山の女の子が汗まみれになって働いてました。私が、主人やお舅様にばれないように通ううちに、仲よくなった娘さんが一人いて。先生、その子、どこから来たと思います。

鏡　きっと、田舎の農家からだろう。

踏子　いいえ、浅草の女の子やったんです。

鏡　へえ。

踏子　まだ小さいころに関東大震災で家の商売があかんようになって、父親と二人、点々として…最後にうちに来たらしいですわ。その子が読み書きが出来たもんですさかい、俳句を教えてあげたんです。

鏡　師弟ってわけか。

踏子　そんなたいそうなもんやありません。でも、そうしたら他の子も面白がって、字が書けない子も、仕事中に考えてきては、私に教えに来るようになって。それを私が帳面に書き写して。

鏡　君が指導するんだから、必ず季語がある正統派なんだろ。

踏子　いいえ、先生も驚くような前衛俳句ばかりです。

鏡　へえ。

踏子　見た事もない俳句がぎょうさん出来たもんで、「今日の台所」に

載せたんです。それが、お舅様の目にとまって。

鏡　どんな俳句を載せたの。

踏子　大事にしもてあります。

踏子、トランクを開けて、ぎっしりつまった帳面と雑誌を探し

だす。

踏子　これやわ。「湖南労働月報」…湖の南のほうのことです。

踏子、ページを開くが、すぐに閉じてしまう。

鏡　早く読ませてよ。

踏子　間違い。別の号でした。

踏子、トランクを閉める。

踏子　また、探しておきます。

鏡　帳面、まだ書いてるんだね。

踏子　先生とは違って、今は自分で俳句を作るより人の俳句を読むほうが面白うて。この中に入ってるのは、殆ど女工さんたちがこしらえた俳句です。どうしても捨てられませんねん。

鏡　持ち運ぶのも大変だね。

踏子　いつか、出版したいと思てます。

鏡　いつか。

踏子　いつか。

鏡　五所さん…いや、青木さん。

踏子　踏子だけでけっこうです。

鏡　俳号じゃなくて？

踏子　いまは、そのほうがしっくりくるんです。

鏡　じゃあ、踏子さん。

踏子　はい。

鏡　さっきね、ここへ帰って来る途中に、川を見ていたんだ。

踏子　川ですか。

鏡　川っていうのは不思議だねえ。よく見ているとね、岩やなにかにぶつかるとね、小さな泡ができるんだ。そういう泡がね、いくつもいくつも生まれては消えていくんだ。
踏子　…
鏡　せめて消えてしまう前に、岩にぶつかって、今という時を刻み付けようとしているんだろうね。流れながら。
踏子　流れながら、変っていくんですね。
鏡　だがそれも、やがてなくなってしまう。欲深い泡も。罪深い泡も。愛し合う泡も。憎しみ合う泡も。

踏子、封筒をバッグに入れると外出の支度をし

踏子　出してきます。あと、ちょっと電話を。
鏡　電話？
踏子　兄に。
鏡　机、使っても。
踏子　片づけます。
鏡　いいよ、君の机を僕が借りるんだから。
踏子　ご自宅は、まだ。
鏡　遠くから覗いてきたけど、だめだね。

鏡、引き出しから手垢にまみれた原稿用紙や句帳の束を取り出す。

踏子　支那日記百句。
鏡　漢口で書きなぐった句を整理していたら、数百句あった…自分でも驚いたよ。
踏子　ほんまに出版出来るんですか。
鏡　印刷所も僕の原稿を待っている…帰国してから書いたものを一部加えて、選りすぐりの百句にする。あとは自分の書いた字をなんとか読まないと…思い出せない俳句があと十ほどある。
踏子　麦田さんと、どないして連絡とってはるんですか。
鏡　新興俳人の検挙は、去年の２月から始まって、５月、８月…次はもうすぐだろう。麦田も慎重になってる。
踏子　私、口は堅いですさかい。
鏡　君は、今の僕の俳句は嫌いなんだろう。
踏子　そうでもないような気がしてきました。先生と話していると。
鏡　…
踏子　日本盆踊り月報が休刊になって、次の連載先を探しに上京したんです。原稿が出来るまで、机をお貸しするくらい。
鏡　早く書き上げないと。
踏子　ここは、ホテルの一間やけど、今は私の部屋です。兄の家では子供らといっしょやさかい、あそこに比べたらずっと気楽。それに。
鏡　それに？
踏子　私、このまま東京にとどまるかもしれません。
鏡　え。
踏子　先生、困らはりますか。
鏡　いや、あの。
踏子　自分一人の力で、生きてみようと思うんです。そこでまた、俳句を作り続けようって…
鏡　…
踏子　さあ、早よ出してこんと。（行こうとする）
鏡　待って。…えっと、あの、そうだ。（紙袋を差出し）、触って。
踏子　あったかい。
鏡　何だと思う。
踏子　（柔らかく握って）
鏡　おっと、潰さないで。

踏子　柔らかい焼き芋ですこと。
鏡　コロッケだよ。
踏子　コロッケ。
鏡　あとで。
踏子　急いで帰ります。
鏡　冷めないうちに。

踏子、出ていく。
鏡、『コロッケの唄』を鼻歌まじりに歌い、

鏡　もう、時間があまりないんだ。次は、僕の番だ。

鏡、机の新聞や原稿用紙を端に寄せ、原稿を書きはじめる。歳時記を取ろうとして、新聞類を床に落としてしまう。片付けついでに、足元の踏子のトランクを開けてそれらを仕舞おうとする。トランクの中の帳面を１冊手に取る。

鏡　（表紙を読む）女工俳句。昭和１０年２月。
（ページをめくり）
「子を置いてはたらく乳房汗ばみし」
（ページをめくり）
「空腹や砂の混じった南京米」
（別の一冊を手に取り）
女工俳句。昭和１２年８月。
「三つ編みをほどいて痒し虱わく」
（次々と、帳面をめくってゆく）…踏子さん、君の句は一つもないのかい。

鏡、「湖南労働月報」を見つける。
鏡　「湖南労働月報」、これか。

鏡、ぱらぱらとページをめくる。雑誌の中から、一枚の写真を見つける。それは、幼い赤ん坊と踏子が一緒に写った写真。
鏡、驚き、暫し一人で打ちのめされる。
踏子が戻って来る。

踏子　先生。
鏡　猫なんかじゃない。
踏子　え？
鏡　唄子さんが捕まった後、君は僕に、猫と椿の木のことを話してくれたね。
踏子　…
鏡　君が失ったのは…
踏子　猫です。ほんの子猫です。
鏡　でも、これは君と…その…

鏡、写真を踏子に手渡す。

踏子　…
鏡　すまない。そこに座って。もっとゆっくり話そうじゃないか。この８年間、君と、僕に、それぞれ起こった事を。
踏子　先生、今は時間がありません。

踏子、写真を置いて、鏡の上着や荷物を支度しはじめる。

踏子　聞き込みが。

鏡　…！

逃げるために窓を開ける踏子。
風が吹き込み、鏡の原稿が飛び散る。

踏子　アッ。

原稿をかき集める鏡と踏子。
鏡、拾ったメモ帳を見て、

鏡　この手帳。確か、走り書きを。

鏡、机に向かい歳時記をめくる。

鏡　思い出した。ずっと、頭にひっかかっていた、あの一群の句。（原
稿用紙に思い出した俳句を書き留めてゆく）

踏子　後に。

鏡、一瞬手を止めて

鏡　踏子さん。

踏子　…

鏡　山を登るのに、道は一つではありません。僕は険しい道を
ゆくけれど、君は、君の道をゆきなさい。

踏子　先生。

鏡　そして時には立ち止まり、鳥の囀りに耳をすまし、川のせ
せらぎで口を濯ぎなさい。

踏子　鏡先生。

鏡　僕たちは別々の道を行く。いいかい、これは破門じゃない。もし、僕が途中で山を登れなくなった時、君は僕より先を歩いているかもしれない。そう思う事が、僕にとっては何よりの励みなんだ。だから踏子さん、君は、君自身の道を歩むのを、決してやめないで欲しい。

踏子　ほおずきの足。

鏡　そう、ほおずきの足です。

ドアをノックする音。
踏子、背中でドアをふさぐ。

踏子　（小声で）早く！

鏡　先に行くんだ！

踏子　でも。

鏡　（急いで原稿を書く）あと少し、思い出せるだけ。（震える手で
書いてゆく）
「いっせいの射撃をうけし枯柳」
「懇願す男の腕を切り落とす」
「死体から金歯を抜いて日本兵」
「真裸の女の股を切り裂きぬ」
「空き腹の蛙の如し嬰児泣く」

ドアをノックする音、次第に乱暴になってゆく。
扉の前で逡巡する踏子、鏡は書き続け…溶暗。

―幕―

※劇中の俳句は全て作者のオリジナルです。

２０１５年３月２０日改訂